

# 「私や自由の動物だから、あきらめられぬとあきらめる」 あきらめ節とわからない節は古いのか

地主金持は我儘者で、役人なんぞは威張る者。

こんな浮世へ生れて来たが、我身の不運とあきらめる。

お前この世に何しに来たか、税や利息を払うため。

こんな浮世へ生れて来たが、我身の不運とあきらめる。

苦しかろうが又辛かろうが、義務は尽くさにならぬもの。

権利なんぞを欲しがる事は、出来ぬ者だとあきらめる。



たとえ姑が鬼でも蛇でも、嫁は柔順（すなお）にせにやらぬ。

どうせ懲役するよなもの、何も言わずにあきらめる。

借りたお金は催促されて、貸したお金は取れぬもの。

どうせ浮世は斯様（こう）したものと、私や何時でもあきらめる。

米は南京、お菜（かず）はひじき、牛や馬ではあるまいし。

朝から晩までこき使われて、死ぬよりましだとあきらめる。

どうせ此の世は弱い者いじめ。貧乏泣かせだ是非もない。

こんな浮世へ生れて来たが、我身の不運とあきらめる。

汗を絞られ油を取られ、血を吸い取られた其の上に、

投（ほう）り出されてふみつけられて、これも不運とあきらめる。

長い者には巻れて了（しま）え。泣く子と地頭にゃ勝たれない。

貧乏は不運で病気は不幸、時よ時節とあきらめる。

あきらめなされよ、あきらめなされ、あきらめなさるるが無事である。

私や自由の動物だから、あきらめられぬとあきらめる。



この「あきらめ節」はもともと添田唾蟬坊（あぜんぼう 1872 年生まれ）の詞で、私が知っているのは高田渡が歌っていたからである。やや哀調を帯びているのもいい。もちろん最後の「私や自由の動物だから、あきらめられぬとあきらめる」に意味があるのはいうまでもない。

1970 年前後の歌だと思うが、民放連の「要注意歌謡曲」の指定を受けている。権力者や社会に対する

批判を取上げないのは、わが国マスコミの業病なのかもしれない。

なお高田は2005年4月16日、公演先の北海道で心不全のため死去。享年56才。

唾蟬坊には「わからない節」（1906年）というのもあって、これは文部省唱歌「夏は来ぬ」の作曲者である小山作之助が曲を作っている。二人にどういう縁があったのだろう。

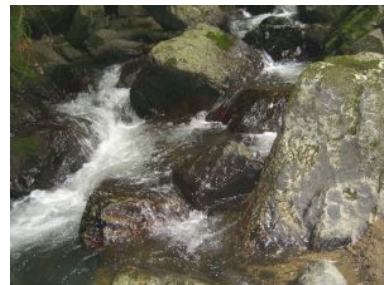
## わからない節

ああわからないわからない 今の浮世はわからない  
文明開化というけれど 表面ばかりじゃわからない  
瓦斯や電気は立派でも 蒸汽の力は便利でも  
メッキ細工か天ぷらか 見かけ倒しの夏玉子  
人は不景気々々と 泣き言ばかり繰り返し  
年が年中火の車 廻しているのがわからない

ああわからないわからない 義理も人情もわからない  
私欲に眼（まなこ）がくらんだか どいつもこいつもわからない  
なんぼお金の世じゃとても 赤の他人はいうもさら  
親類縁者の間でも 金と一と言聞く時は  
忽ちエビスも鬼となり くまたか眼をむき出して  
喧嘩口論訴訟沙汰 これが開化か文明か

ああわからないわからない 乞食に捨児に発狂者  
スリにマンビキカップライ 強盗窃盗詐欺取財  
私通姦通無理情死 同盟罷工や失業者  
自殺や餓死凍え死 女房殺しや親殺し  
夫殺しや主殺し 目も当てられぬ事故（こと）ばかり  
無闇矢鱈に出来るのが なぜに開化か文明か

ああわからないわからない 賢い人がなんぼでも  
ある世の中に馬鹿者が 議員になるのがわからない  
議員というのは名ばかりで 間抜けでふぬけで腰抜けで  
いつもぼんやり椅子の番 唾かつんぼかわからない



「唾」「つんぼ」など、今は用いてはならない差別言葉もあるが、ちょうど100年前の歌。天皇バンザイの時代であり、言葉と人権に対する意識は今とは違う。「あきらめぶし」や「わからない節」は古いどころか、ひょっとしてますます新鮮に感じるかもしれない。格差社会が進む今日、ついそう思ってしまう。

総裁、党首、委員長に大阪9区の補選とマスコミが騒ぐが、選ばれた者をありがたがるのはほんの一部、取り巻きだけだ。

わからない節の「賢い人がなんぼでもある世の中に、馬鹿者が議員になるのがわからない。議員というのは名ばかりで、間抜けでふぬけで腰抜けでいつもぼんやり椅子の番」の歌の文句ではないが、庶民はどこか冷めて、時には馬鹿にする。人間チョボチョボ、偉ぶっていると足をすくわれてしまう。議員たるもの庶民を馬鹿にしても庶民から馬鹿にされてもいいけない。

(山下ブログより)